
FAIRY TAIL ~ 五つの鳳 ~

レイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY TAIL ～五つの凰～

【Nコード】

N1125Y

【作者名】

レイト

【あらすじ】

滅竜魔導士とは、また違う特殊な魔法を持つ少年リオが妖精の尻尾くフェアリーテイルで活躍する物語。この物語は原作に沿って話を進めていく方針ですが、物語の脱線、時間軸のズレなどが起こる可能性もありなので御注意を！

オリジナル話も入れていきます

キャラ設定

名前

リオ・クリーレン

伝説と言われる五つの輝きを放つ鳳凰に育てられた少年。鳳凰の名はレーベンハイル・・・五つの輝きにはそれぞれ、再生、闇、光、風、地の力が込められている。

能力

その輝きに応じて力を扱う大地の魔法。光と闇はリオの力ではバランスを上手く保てないため自ら扱うのを禁止している。この五つの輝きを合わせることで初めて大地の魔法を使用できるようになる

鳳凰と言ってもドラゴンにくらべ攻撃力も防御力も劣るが、自らの魔力を消費する再生の炎でそれを補っている。

再生の炎は他者を癒すのには不向きで、天空魔法のように他者を癒すことはできない。

この小説では鳳凰を大地の守り神として扱っていきます

キャラ設定（後書き）

この設定には後から付け足していく予定？もあるかも、ですよ！

新たな家族を

「ここが・・・魔導士ギルド、フェアリーテイルか・・・」

今、俺・・・リオ・クリーレンとはあるギルドに来ている。理由はいたって簡単だ鳳凰・・・レーベンハイルに少しでも近づくには有名なギルドにでも入って情報を集めるのが良い、そう判断したためだ。

俺はまだガキだ、一人で何かするには力が足りなさすぎる・・・ちなみに歳はわかんねえ、理由は俺がどこで生まれたのかがわからない・・・ただ、わかるのはレーベンハイルが俺をここまで育て大地の魔法を俺に教えてくれたってことぐらいだ。

「って、心の中で誰に説明してんだろーな・・・」

ま、何にせよ入ってみなきゃ話は進まない。

「・・・・・・・・」

あまりの騒がしさに絶句した・・・いや、二人のガキ・・・と、言っても俺もガキだが。

その二人が殴りあってるし、めちゃくちゃ騒がしいしで最悪だ。もう少し静かにできないものなのだろうか・・・

「お！新入りか？・・・って、まだ子供じゃねえか」

「マスターって人に会いたいでけど・・・」

「マスター？奥にいるのが、うちのマスターだよ」

・・・ちっさw、あ・・・wなんてつけちまったじゃねえか。

とりあえず、俺はそのマスターって人に話しかけてみる・・・いや、そうしないと話進まないしな！

「俺、ここのギルドに入りたいんだ・！！」

「ふむ・・・」

少しの間、真剣な眼差しで俺の目を覗き込むとすぐに顔を変え

「オッケー！！」

え・・・？こんな簡単に？試験とかないの？

「え・・・あの・・・」

「ん？」

「いいんですか？その・・・こんな、簡単に・・・」

「お前の目を見りゃわかる、何か大切な理由でもあるんじゃないろ」

「あ、ありがとうございます！俺、リオ・クリーレンって言います
！」

マ「ふむ、リオよ今からお前はこのギルドの一員。それを心していくんじゃぞ」

俺「はい！」

こんな感じで無事ギルドへ入ることに成功した・・・これで、一安心か・・・

？「おい！お前、俺と勝負しろ！」

俺「・・・・・・は？」

周りからは「ナツが新人と勝負するつてよ！」、「俺はナツに賭けるぜ」などと・・・良くわからない声が聞こえてくる

ナ「俺はナツ、お前は？」

俺「リオだ、それで・・・何でいきなり勝負？」

ナ「理由なんか知らねえ！」

えー・・・・・・知らないんだー・・・・orz

ああ・・・・俺・・・・このギルドでやっていけるかなあ・・・・？

新たな家族を（後書き）

次はナツとの戦闘です

滅竜魔導士

- リオside -

ナ「勝負だ勝負!!」

勘弁してくれ・・・俺はまだ力を使いこなせていないのに・・・

周りも盛り上がってるし断りづらいよな・・・仕方がない、やるしかねえな

俺「いいぜ、やってやるよ」

はあ・・・災難だ

ナ「いくぞ! 火竜の鉄拳!!」

俺「ちよっ!?! いきなりそれは・・・!! ぐはっ」

痛い・・・いや、痛すぎる。いきなり顔面殴りやがって・・・イライラしてきたぞ

ナ「ん? お前弱いんだな・・・」

ブチッ・・・

俺「やってやんよ、ツリ目の鼻たれ小僧」

俺が使うのは風・・・風の輝きだ

「なんだあれ・・・腕が翼に・・・!？」

周りが騒ぎ始めるのも無理はない・・・魔力により形成された風が翼を形作っているのだから

俺「風刃螺旋舞!!」

風の翼がおこす突風は全てを切り裂く刃となる・・・それが風刃螺旋舞^{ふうじん}

ナ「うおお!？」

つて・・・特に効いてる様子も無いっすね・・・あ、滅竜魔導士
つて体も丈夫なんだっけ？

ナ「なんだよ・・・やればできるじゃねえか、燃えて来たぞ!」

俺「ふう・・・この力は翼だけでなく手に集めることで力を上げる
ことも可能だ、お前ほどじゃねえけど」

ナ「上等だ!!いくぜ!!」

俺「俺もテンション上がってきたあ!!ぶっ飛ばす!!」

その後もどれだけの間戦闘が続いたことか・・・思い出したくも無い・・・まあ、楽しかったけどな

ナ「はあはあ・・・やるじゃねえか・・・」

俺「お前もな・・・」

？「リオ・・・と言ったか？」

俺「え？あ、はい」

ミ「私はミラジェーン・・・エルザ側についたらぶっ飛ばすぞ」

えー・・・話が見えねえよー・・・エルザって誰？ていうか、俺は何に巻き込まれてるんだ？

グ「俺はグレイ、あのクソ炎に付き合ってやるなんてお前もお人好しだな」

ちげーよ、付き合わされたんだよ。無茶苦茶だ・・・

俺「はは・・・はあ、疲れた」

こんなお出向かえは初めてだ・・・ま、悪くないかな。

リ「はい、これどうぞ。私はリサーナ、よろしくね」

俺「ありがと。俺はリオ、よろしく」

水を持ってきてくれた・・・ああ、普通の人がいて助かったよ。それにしてもナツ強かったな。

グレイやミラ、エルザも強いのかな？これは・・・俺が最弱フラグ？！

俺「神よ・・・俺にチカラをくれ・・・」

ミ「アイツ涙流しながら何か言ってるぞ・・・」

ナ「飯でも落としたんじゃないの？」

ああ・・・修行しないと・・・

こうして始まる俺の物語・・・あ、仕事しないと

俺「仕事、仕事・・・っと」

？「これなんてどうだろうか？」

俺「へえ・・・バルカンて何？」

？「ふむ、これは森バルカンという奴でな・・・」

それで、君は誰だ・・・

俺「あのー・・・君は？」

エ「私はエルザ、気軽にエルザと呼んでくれ」

この人が・・・結構真面目なイメージがするけどな

その後に見た光景は凄かった・・・女の子は誰よりも強い・・・うん、そう思うよ。ミラもエルザも喧嘩したら凄いんだもん、死ぬかと思っただわ

こうして、俺のギルドでの生活が始まった

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

リ「何やってんの？」

俺「ん？ちよつとギルドに入っただかりの事を思い出してたんだよ・・・」

ナ「また、勝負すつか？」

俺「しねーよ、馬鹿」

俺がギルドに入ってもう、数年経つ。今では、もうみんな俺の家族

同然だ。

俺「さて、今日も張り切って仕事に行くとしますか」

レ「あ、私も行く！」

この小さいのはレビィ・マグガーデン。最近コイツと仕事に行く回数が増えてきた。

今日のは簡単だな、山賊退治だ。

レ「早く、早くー！」

俺「昼寝してーよ・・・ま、いつか」

俺は今日も元気に妖精の尻尾やってます

仕組まれた依頼

- リオside -

俺「今日の依頼は・・・山賊の退治？楽勝だなっ」

レ「そうやって気を抜いてると怪我するよ？」

今俺とレビイとはある依頼を受け山賊の退治にやってきてる。最近いくつかの村が襲われているとの情報で、ちょうどフェアリーティルの近くまで来てるからグッドタイミングって感じだな。

俺「てか、お前チームは放っておいていいのかよ・・・」

レ「大丈夫、それにリオもチームみたいなものでしょ？」

そうなのか・・・知らなかったよ・・・。俺は今のところチームは組んでおらず一人で行くか、誘われたら一緒に付いていくみたいな状態でいつレビイのシャドウ・ギアに組み込まれたのかわかんないわけがない

俺「はあ・・・ま、目的地までちょっと距離があるし少し休むか」

レ「そうだね」

その目的地は山の最深部、山賊の隠れ家ってところだ。

俺「この依頼が終わったらとっとと休みてー・・・むしろ、旅行に

行きてーよ・・・」

レ「じゃあ、私達で行こうよ！旅行」

俺「そうだな・・・っ!？」

レ「ん？どうしたの？」

俺「いや、なんでもねえよ」

さつきから感じるこの胸騒ぎは何だ・・・？この依頼には何か裏がある気がしてならない。それにレビィは気づいてねえみたいだけど、さつき・・・ほんの一瞬、凄い魔力を感じた。

それは山賊なんてレベルじゃない・・・多分、今の俺じゃ勝てない・・・そんな力だ。もし、ソイツが襲ってきたらヤバイなレビィを庇って逃げるのは無理だ。

俺「面倒なことが起こらないうちにさつさと片付けるか・・・」

レ「面倒なこと？」

俺「ああ・・・面倒なことだ」

- レビィ side -

さつきからリオは何か考え込んでるみたいで何も喋らないし、何かを警戒しているみたいに見える・・・何かあるのかな・・・？

それに面倒なことってなんだろ・・・

とりあえず私は足を引つ張らないようにしなくちゃ！

- リオside -

あの後、山賊の退治したいは案外簡単に終わった。

あの強大な魔力は山賊のものじゃなかったってわけか・・・じゃあ、一体何者だ・・・？

レ「ねえ、聞いてる？」

俺「え？あ、ああ悪い考え事しててな。何の話だったっけ？」

レ「旅行の話だよ！もう・・・」

俺「悪い悪い、今度はちゃんと聞くからさ。まずは場所だよな、やっぱり旅行といたら・・・！？」

レ「！？」

今度はレビイも気付くだろつな・・・完全に俺らを狙ってやがる。

どこだ・・・どこから・・・

俺「よける！！」

レ「え？」

空からの魔法・・・これほどの威力、一体誰が！？それよりも、このままじゃ間に合わねえ！！

身代わりになるしかねえな・・・！

俺「ぐっ・・・！」

レ「リオ！？」

この魔力・・・普通の魔導士じゃねえ！

とりあえず、レビィを逃がすことを考えろ！！

俺「風の羽ばたきよ・・・レビィを・・・彼女をできるだけ遠くに飛ばせ！！」

俺の作りだす翼から一枚だけ羽を取り、レビィへ向けて魔力を開放するとレビィの体は宙を舞い遠くの街へと飛ばされる。

今度は相手の居場所がわかったぜ、ここは俺が食い止める！

俺「岩隔壁！！」

俺の岩石の翼から羽が舞い、巨大な岩の壁が現れる

？「やはり・・・目障りだな、フェアリーテイルは・・・」

俺「クソッ・・・どこの誰だか知らねえけど、アイツはもういねえ。お前の相手は俺がしてやんよ」

？「最初から君が狙いで来んだよ・・・不死鳥さん」

！？・・・俺が狙いだと？

俺「狙った？俺がこの仕事を引き受けない可能性もあったのか？」

？「君には特別な魔法をかけたからな・・・問題ないさ」

俺「俺が狙い・・・ね。ぶつ潰してやるから来いよ」

？「フンッ」

俺「ぐあああっ！！」

な、なにが起こった？アイツの手が光った瞬間痛みが・・・

？「お前はまだまだ未熟過ぎる、私のギルドで鍛えなおしてあげよう・・・我が幽鬼の支配者でな」
ファントムロード

俺「な！？」

瞬間俺は闇に包まれた・・・

- レビイ side -

私「そんな、足は引つ張らないって決めたのに！！」

遠くから見て岩の壁が崩れていくのが見える、あの魔法はリオがやられなければ崩れることはない・・・つまり、リオはあの魔導士にやられちゃった・・・ってこと・・・

私「早く皆に伝えないと!!」

涙が溢れて止まらない・・・どうしたらいいの？

- 三人称 side -

今フェアリーテイルへ一人の少女が駆け込んできた。彼女の名前はレビィ、先ほどまでリオと共にいた魔導士である

レビィ「みんな!! リオが・・・リオが・・・!!」

息も上がり、まともに話すこともできない。ギルドの仲間も普段とは違う雰囲気戸惑いを隠せないでいるようだ

グレイ「どうした？落ち着いて話してみろ」

それから彼女は今まで起きたことを話した

ナツ「アイツがやられた・・・？そんなことあるはずがねえ!!」

ミラ「そうだ、アイツは強い・・・!!」

仲間たちも今だに事実を受け止められずに戸惑っている。

レヴィ「私だけ・・・逃げてきた・・・！」

エルザ「無事で良かった・・・それにしても何者なんだ・・・ソイツは！」

これが、リオが消えた今から二年前の出来事。

その後はリオも見つかっておらず死んだ・・・と、いうことになっている

- リオside -

俺は一体どうなったんだ・・・わからねえ・・・記憶も曖昧だ、俺は一体・・・

「お前は我がファントムロードの魔導士だ」

俺はファントムロードの魔導士・・・？

「・・・お前は妖精を潰すのだ、ガジルと共に」

そうか・・・フェアリーテイルを潰すのが俺とガジルの仕事か

でも、何だ？この違和感・・・何かが引っかかるんだよね・・・

俺は誰なんだ・・・

ギルド襲撃

- リオside -

俺「ガジル・・・俺たちはギルドを襲撃するんだよな・・・」

ガジル「そつだよ、何だあ？ビビってんのか？」

馬鹿にしているように笑ってるが別にどうでもいい・・・

まるで自分の居場所を自分で壊してしまうような。そんな恐怖心が俺の心にあつた

俺「俺は本当に幽鬼の支配者のメンバーなんだよな・・・」

ガジル「ああ、そつだ」

何もかも滅茶苦茶だが、今は与えられた仕事をこなす・・・

そうして俺たちは深夜のギルドへと向かいぶつ壊した。主にガジルがやったんだけど・・・

その次の日の夜・・・

ガジル「俺は少しやることがあるからテメエはここで待ってる」

俺「やること・・・？」

そう言うところガジルはどこかへ行ってしまった

俺「待つてる・・・と、言われても暇だしな・・・行ってみるか」

そうしてガジルの向かった方へと、腕を炎の翼に変え飛んでいく。
何をやるつもりかは知らないが多分口なことじゃないんだろう

ガジル「何だ来ちまったのか」

俺「・・・」

そこで見たのは女が一人、男が二人・・・凄い傷で倒れていた。三人とも妖精の尻尾の魔導士だろう。その光景を見ているだけで怒りが湧いてくる・・・理由はわからない。

俺「やることつてのはコレか？」

ガジル「こうでもしねえとアイツらは動かねえからな」

その後ガジルは三人を木に貼り付け、幽鬼の支配者のマークを描きギルドへ戻ってしまった。

・・・なんでこんなに悲しくなるのかはわからない・・・俺は無意識のうちに再生の炎を三人に灯していた、この炎は長時間体内で燃え続ける明日まで持つはずだ

レビィ「リ・・・オ・・・？」

俺「俺の炎は他者を治す能力に長けているわけじゃないが傷の回復を早めてくれる・・・きつと明日の夜には良くなっているだろう・・・」

レビィ「うつ・・・」

俺の名前を知っている、何故知っているのか・・・そう聞こうとしたが、俺の名前を呟くと気絶してしまった

他の三人にも同様に手当てをし、木から下ろしてやった。だが傷はまだまだ癒えてはいない・・・きつと朝になっても傷だらけだ。

俺は何か心が引つかかったままギルドへと引き返した

懐かしき記憶

- 妖精の尻尾 side -

朝になりマグノリア南口公園・・・

そこには、ある木を中心に人集りができていた・・・「誰か下ろしてやってくれ」「でもあのマークは・・・」などという声が聞こえてくる

エルザ「すまん、通してくれギルドの者だ」

そう言つて妖精の尻尾S級魔導士のエルザが群集をかき分け進んでいく

グレイ「ジエット！ドロイ！！」

ルーシィ「レビィちゃん！！」

傷つき倒れている仲間の元へと駆け寄っていくのは妖精の尻尾の魔導士、グレイとルーシィである

マカロフ「ボロ酒場までならガマンできたんじゃないかな・・・ガキの血を見て黙ってる親はいねえんだよ・・・」

怒りを露にする、妖精の尻尾マスター・・・マカロフ

マカロフ「戦争じゃ」

こうして妖精の尻尾と幽鬼の支配者の全面戦争が始まることとなる・

-
リ
オ
s
i
d
e
-

俺「俺らはマカロフがマスターを潰すために争いの場から消えたところ
で襲撃するんだっとな・・・」

ガジル「そうだ、今日で妖精の尻尾も終わりだなあ」

マスタージョゼの計画通り妖精の尻尾はギルドへと攻めて来て、マカロフは最上階を目指し登っていった

ガジル「へへっ……一番やつかいなのが消えたトコでひと暴れし
ようかね」

俺
「
・
・
・
・
・
」

俺とガジルは戦場へと降りていき、俺の顔を見た妖精の尻尾の動きが止まる・・・

エルザ「そんな何故だ……」

ぐれい「なっ……なんでお前が」

ナツ「なんで……なんでお前がそんなトコにいるんだよ!!! リオ!!!」

俺「・・・俺にはわからない・・・何もわからないんだ」

腕を岩の翼へと変え風を纏わせる。地と風の輝きを合わせた混合魔法。

俺「岩烈旋空くがんれつせんくう>・・・五月雨!」

竜巻と岩翼の羽による二重魔法

ナツ「ぐっ・・・俺達は仲間だろ!」

俺「なか・・・ま・・・?」

ナツ「そうだ!お前は俺達妖精の尻尾の仲間だ!」

俺「違う・・・俺は幽鬼の支配者の魔導士だ・・・」

ナツ「ちげーよ、だったら何でお前は泣いてんだ?」

!?・・・俺が・・・泣いている?

気が付けば魔法は消えていた。何が何だかわからない・・・俺は一体何者なんだ・・・!?

俺を仲間と呼んだ魔導士とガジルが闘りあってるが今はそれも気にならない・・・俺は・・・

その考えはマカロフが上から落ちてきたことで中断された、どうやらジョゼの計画通りにマカ・・・ロフを・・・マス・・・ター・・・

を・・・マスター・・・はマカ・・・ロ・・・フ？

俺は・・・

ジヨゼ「さあ、リオさんも撤退を」

俺「・・・よ」

ジヨゼ「早く撤退を・・・うるせえよ・・・今はそんなのはどうでもいい・・・マスターはマカロフ？俺は幽鬼の支配者・・・？何が何だかわかんねーぞオイ・・・少し頭を冷やしてくる」

俺はジヨゼの元へは行かずマグノリアを目指し飛び立った

俺「俺は・・・どうしたらいい」

- ジヨゼ side -

やれやれ、困ったガキだ。記憶の操作を施してもそろそろ限界か・・・妖精共を潰してから手に入れるつもりだったがあのがキも記憶を取り戻しかけてる。だったら・・・妖精に戻してあげるくらいなら一緒に消してあげるしかないよなあ？

変わらぬ思い

- リオ side -

・・・今俺はマグノリアに来ている。良い街だ・・・俺はこの街を知っている。それで大好きなんだよな、きつと・・・

ズシィ・・・ズシィ・・・

何かが近づいてくる音が聞こえてくる。ふとそちらへ目を向けると・・・

俺「嘘だろ・・・！？まさか消し飛ばす気が・・・？」

わかっていた、ジョゼが魔導集束砲ジュピターを使用することが

俺「ギルドを守らねえと！！俺達の街を！！」

その思いと共に俺は不死鳥へと姿を変え飛び立った

- 妖精の尻尾 side -

エルザ「想定外だ・・・こんな方法で攻めてくるとは・・・」

六足歩行ギルド幽鬼の支配者がこちらへと進んでくるのが見える。

ジョゼ「魔導集束砲ジュピター用意・・・消せ」

ギルドから砲身が見え、魔力を溜めているのがわかった

エルザ「マズイ・・・！全員ふせるオオオ！！」

今この状況をどうにかできる可能性があるのはエルザだけしかない

エルザ「換装！！」

エルザは金剛の鎧へと換装しジュピターの衝撃にそなえる

ナブ「いくら超防御力を誇るその鎧でも・・・」

ナツ「エルザ！！」

グレイ「ナツ！！ここはエルザを信じるしかねえんだ！！」

飛び出そうとするナツを必死にグレイが抑えている。

ジュピターが放たれた瞬間に皆が驚いた、ギルドへと届く直前に何かが壁となりジュピターを受け止めているのである

エルザ「アレは・・・フェニックス・・・リオか！？」

一羽の不死鳥がジュピターをその身で受け止めているのである

リオ「ぐっ・・・やらせるかアアア！！！！」

なんとかジュピターを受けきったリオの体はその衝撃で吹き飛ばさ

れ妖精の尻尾へと激突する

ナツ「リオ!!」

ミラ「リオ!?!まさか・・・生きて・・・?」

リオのボロボロに傷ついた体の傷口から炎が吹き出し傷が治っていきが完全に治癒することはできなかった

カナ「なんて馬鹿なことを・・・!!アンタの能力は不死身じゃないんだよ!?!」

リオ「うつ・・・ごめん・・・皆・・・今、思い出したんだ俺は妖精の尻尾の魔導士だったこと。守りたかった・・・このギルドを・・・だから」

ミラ「今は喋っちゃ駄目、まだ深い傷もあるし魔力も消費してる・・・」

- リオside -

ジョゼ「記憶を弄ってやったのに人形にはなれなかったな、リオ・・・それにマカロフも戦闘不能。エルザだけで我々を潰すことはできない」

ナツ「記憶・・・?それで、リオは・・・テメエは許さねえ!!」

ジョゼ「ルーシィ・ハートフィリアを渡せ今すぐだ」

「ふざけんな!」「仲間を敵に差し出すギルドがどこにある!」「ルーシィは仲間なんだ!」

沢山の声が聞こえる・・・やっぱギルドはこうでなくっちゃな・・・

俺「オイ・・・ジョゼエ・・・お前には渡さねえよ、俺はギルドを壊し皆を傷つけた・・・それでも、ギルドの・・・コイツらの仲間を奪おうとするなら俺はテメエを潰す・・・!!」

ジョゼ「リオ、その体で何ができる?早く渡せ」

ナツ「俺達の答えは何かあっても変わらねえ!!おまえ等をぶっ潰してやる!!」

ジョゼ「ならば、さらに特大のジュピターをくらわせてやる!!装填までの15分間、恐怖の中であがけ!!」

ちっ・・・まで、アレを撃つのか・・・止めねえと・・・でも意識が・・・

・ミラジエーンside・

ミラ「リオをギルドに、ルーシィは・・・」

ミラはルーシィに眠りの魔法をかけるとリーダーダスに隠れ家へと運ぶように頼み、自身はルーシィへと変身した

ミラ「昔から無茶ばっかやってたよね・・・リオ、でも生きていて良かった・・・」

リオは二年前に謎の魔導士きつとジョゼだ・・・ジョゼに襲われて行方不明になった。てつきり死んでしまったとばかり思っていたけれど記憶操作をされ自分は幽鬼の支配者だって思い込まされて無理やりギルドを襲わされた・・・だって、リオの顔には泣いたあとがあったから

さつき聞いた話ではレヴィ達の回復が凄く早いらしい・・・きつと再生の炎を三人に灯したんだと思う・・・

今ボロボロになっているリオを守れるのは私だけだ、皆はギルドを守ってくれている。すっかりしなくちゃ

- リオside -

俺は・・・

目を覚ますと、ギルドで寝かされていた。今ジョゼの話を聞いた限りではルーシイって子が捕まったらしい・・・エルザも幽鬼の支配者の中に入って行ったようだ

俺も・・・決着を着けよう。

待ってるジョゼ、俺の光でお前を消し飛ばす！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1125y/>

FAIRY TAIL ~ 五つの鳳 ~

2011年11月4日03時00分発行